

ダイズの病害虫防除対策（8月）

1 紫斑病

- (1) 開花後25日頃から莢や茎、葉に紫黒褐色の不整形病斑を作ります。また、種子には莢が黄化するころから紫色の病斑がへそを中心に拡大し、品質低下の原因になります。
- (2) 薬剤防除は開花後20～40日頃に1～2回実施してください。その際、薬剤が莢に十分付着するように散布してください。
- (3) 収穫が遅れると被害が大きくなるため、適期収穫を実施してください。また、高水分のまま放置すると被害粒が増加するため、収穫後は速やかに乾燥・脱穀を行ってください。

表1 紫斑病の防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10aあたり 使用量（散布液量）	使用回数 の制限※
散布剤	ベルコート水和剤	イミノクタジン	M7	収穫7日前まで	1,000倍	4回以内
	ベルコートフロアブル	イミノクタジン	M7	収穫7日前まで	1,000倍	4回以内
	アミスタートレボンSE	エトフェンプロックス	3A	収穫14日前まで	1,000倍 (100～400L)	2回以内
		アズキシストロビン	C3			
Zボルドートレボン粉剤DL	エトフェンプロックス 銅	3A	収穫14日前まで	3～4kg	2回以内	
		M1				
よる無人航空機に散布	アミスター20フロアブル	アズキシストロビン	C3	収穫7日前まで	16～24倍 (0.8L)	2回以内
	ベルコートフロアブル	イミノクタジン	M7	収穫7日前まで	6倍 (0.8L)	4回以内
	アミスタートレボンSE	エトフェンプロックス	3A	収穫21日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内
アズキシストロビン		C3				

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・イミノクタジンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、種子粉衣は1回以内）
- ・エトフェンプロックスを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・アズキシストロビンを含む農薬の総使用回数：2回以内

2 べと病

- (1) 本病は降雨の多い6～7月と9月に多発し、葉に黄白色の不整形病斑を作り、葉の裏に淡灰色の綿毛状の菌叢ができます。発生が多いと生育の抑制や落葉がみられます。
- (2) 罹病が多い品種（里のほほえみ等）では、生育初期から発生がみられるので、密植や過繁茂で通気性が悪くなり、湿度が高くなるように注意してください。
- (3) 薬剤による防除は発生初期から7～10日おきに実施してください。

表2 べと病の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	使用回数 の制限※
アミスター20フロアブル	アズキシストロビン	C3	収穫7日前まで	2,000倍	2回以内
フェスティバルM水和剤	ジメトモルフ	H5	収穫45日前まで	750倍 (150～300L)	3回以内
	マンゼブ	M3 UN			
ライメイフロアブル	アミスルブロム	C4	収穫7日前まで	2,000倍	3回以内
ランマンフロアブル	シアゾファミド	C4	収穫7日前まで	1,000～2,000倍	3回以内
リドミルゴールドMZ	マンゼブ	M3 UN	収穫45日前まで	500倍	3回以内
		メタラキシル及び メタラキシルM			

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・アズキシストロビンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・ジメトモルフを含む農薬の総使用回数：3回以内
- ・マンゼブを含む農薬の総使用回数：3回以内
- ・アミスルブロムを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、種子への処理は1回以内、散布は3回以内）
- ・シアゾファミドを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、種子への処理は1回以内、散布は3回以内）
- ・メタラキシル及びメタラキシルMを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、種子粉衣及びは種前の塗抹処理は合計1回以内、は種後は3回以内）

3 アブラムシ類

- (1) ジャガイモヒゲナガアブラムシはダイズわい化病ウイルスを媒介することがあります。ダイズアブラムシやマメアブラムシは多発すると葉に黄色の吸汁痕が多くみられ、葉の萎縮などが発生します。
- (2) わい化病が発生したことがあるほ場では、有翅虫飛来初期から薬剤による防除を行ってください。それ以外のほ場では、葉に黄色の吸汁痕がみられる場合は防除を行ってください。

表3 アブラムシ類の防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 使用量(散布液量)	使用回数 の制限※
散布剤	エルサン乳剤	PAP	1B	収穫7日前まで	1,000~2,000倍	2回以内
	オルトラン水和剤	アセフェート	1B	収穫60日前まで	1,000倍	3回以内
	ダントツフロアブル	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	2,500~5,000倍	3回以内
	マラソン乳剤	マラソン	1B	収穫7日前まで	2,000~3,000倍	3回以内
無人航空機 による散布	オルトラン水和剤	アセフェート	1B	収穫60日前まで	16倍 (1.6L)	3回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・PAPを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・アセフェートを含む農薬の総使用回数：3回以内
- ・クロチアニジンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、は種時の土壌混和は1回以内、散布は3回以内）
- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：3回以内

4 ツメクサガ

- (1) 6月後半と8月後半に幼虫が出現します。6月後半の被害は本種によるものが多く、被害は突発的に発生することが多いです。第2世代は葉のほかに莢や種子を大きくえぐったように食害します。
- (2) 第1世代幼虫の食害が目立つ場合は、薬剤による防除を行ってください。虫齢が進むと加害が急激に多くなるため、防除時期が遅れないようにしてください。

表4 ツメクサガの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	使用回数 の制限※
エルサン乳剤	PAP	1B	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・PAPを含む農薬の総使用回数：2回以内

5 ウコンノメイガ

- (1) 成虫は7月上旬からほ場に飛来し、7月下旬頃から幼虫が発生します。幼虫は葉を円筒状に巻き、8月中旬のピーク時にはほ場全体に多くの葉巻被害がみられます。莢は加害しませんが、多発すると登熟に影響します。
- (2) 生育が旺盛で葉色が濃く、株が繁茂しているほ場で葉巻被害が多くなる傾向があります。ほ場によって発生状況の差が大きいため、よく確認してください。
- (3) 葉巻の発生が目立つ場合は、若齢幼虫の多い7月下旬~8月上旬に薬剤による防除を行ってください。

表5 ウコンノメイガの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	使用回数 の制限※
スミチオン乳剤	MEP	1B	収穫21日前まで	1,000倍	4回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・MEPを含む農薬の総使用回数：4回以内

6 マメハンミョウ

- (1) 成虫は7月から8月にかけて出現し、群れで葉を食害します。加害しながら移動するため、発生が多いと葉が食い尽くされることがあります。
- (2) 8月末ごろから地中に産卵し、幼虫はイナゴなどの卵を食べて成長します。
- (3) 食害が目立つ場合は薬剤による防除を行ってください。

表6 マメハンミョウの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a当たり使用量	使用回数 の制限※
マラソン粉剤3	マラソン	1B	収穫7日前まで	3kg	3回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：3回以内

7 吸実性カメムシ類

- (1) 開花期（7月下旬～8月上旬）以降に飛来し、莢や葉に産卵することで幼虫が黄熟期まで長期にわたって加害します。子実肥大の初期に加害されると、種子がほとんど肥大しなくなります。中期以降に加害されると変形、変色した子実となり、商品性が著しく低下します。
- (2) 着莢期～子実肥大盛期に1～2回薬剤による防除を行ってください。

表7 吸実性カメムシ類の防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 使用量（散布液量）	使用回数 の制限※
散 布 剤	アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	2,000倍	2回以内
	スタークル液剤10	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	2,000倍	2回以内
	スミチオン乳剤	ME P	1 B	収穫21日前まで	1,000倍	4回以内
	ダントツフロアブル	クロチアニジン	4 A	収穫7日前まで	2,500～5,000倍	3回以内
	トレボン乳剤	エトフェンプロックス	3 A	収穫14日前まで	1,000倍	2回以内
	MR. ジョーカー粉剤 DL	シラフルオフエン	3 A	収穫7日前まで	4 kg	2回以内
	アミスタートレボンSE	エトフェンプロックス アズキシストロビン	3 A C 3	収穫14日前まで	1,000倍 (100～400 L)	2回以内
	Zボルドートレボン粉剤 DL	エトフェンプロックス 銅	3 A M1	収穫14日前まで	3～4 kg	2回以内
散 布 無 人 航 空 機 に よ る	スタークル液剤10	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内
	トレボンエアー	エトフェンプロックス	3 A	収穫14日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内
	MR. ジョーカーEW	シラフルオフエン	3 A	収穫14日前まで	16倍 (0.8L)	2回以内
	アミスタートレボンSE	エトフェンプロックス アズキシストロビン	3 A C 3	収穫21日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・ジノテフランを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、は種時の土壌混和は1回以内、散布、空中散布、無人航空機散布は2回以内）
- ・ME Pを含む農薬の総使用回数：4回以内
- ・クロチアニジンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、は種時の土壌混和は1回以内、散布は3回以内）
- ・エトフェンプロックスを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・アズキシストロビンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・シラフルオフエンを含む農薬の総使用回数：2回以内

8 マメシクイガ

- (1) 土中に繭を作り、越冬するため、連作を続けると発生量が急激に増加します。3年以上の連作はさけ、田畑輪換を行ってください。
- (2) 成虫は年1回、8月中旬頃に羽化します。日長時間に反応して発生するため、発生時期は年ごとに大きく変動しません。成虫が8月下旬～9月中旬に莢に産卵し、幼虫は種子を加害して20日程度で脱出します。
- (3) 3年以上連作しているほ場では8月5半旬頃の薬剤防除を基本とし、多発が予想される場合には9月1～2半旬にも追加防除を行ってください。

表8 マメシクイガの防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 使用量(散布液量)	使用回数 の制限※
散 布 剤	ダイアジノン粒剤5	ダイアジノン	1 B	収穫30日前まで	4～6 kg	4回以内
	プレバゾンフロアブル5	クロラントラニプロール	2 8	収穫7日前まで	4,000倍	2回以内
	Zボルドートレボン粉剤DL	エトフェンブロックス 銅	3 A M1	収穫14日前まで	3～4 kg	2回以内
無人航空機 による散布	プレバゾンフロアブル5	クロラントラニプロール	2 8	収穫7日前まで	16～32倍 (0.8L)	2回以内
	アミスタートレボンSE	エトフェンブロックス アズキシストロビン	3 A C3	収穫21日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・ダイアジノンを含む農薬の総使用回数：6回以内（但し、種子粉衣は1回以内、粒剤は5回以内（生育期の処理は4回以内））
- ・クロラントラニプロールを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・エトフェンブロックスを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・アズキシストロビンを含む農薬の総使用回数：2回以内

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農薬登録情報提供システムホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください（記載中の登録内容は令和4年7月20日現在）。
特記がない場合、液剤、水和剤、乳剤、フロアブル剤の散布液量は10a当たり100～300L散布する。